

風

の

よ

う

に

俳優

榎木孝明

取材/文 あさか
写真 ハリ
取材協力 ホ

流

The
SPECIAL
Real
INTERVIEW
Face

れ

の

ま

ま

に

人間、ナチュラルがいちばん、
仕事も、旅も、恋も……それからいろいろなこと。だれにも、何にも幅びず、気持ちいいこと、していたい。こんな男、こんな役者、ひとりは、いてもいい。

至福の時間です

何やら怪し気な器具が雑然と並んだ狭い一室。センベイ布団にくるまっていた男がモソモソと起き上がる。ボサボサ頭で大あくび、やっと目を開いて

「お・は・よ・よ」

おかしな発明男「間宮浩平」は、秋も深まったある日、こうして朝のプラウン管に登場した。NHKの連続ドラマ「かりん」の一シーンである。榎本孝明にとっては、久々の「朝ドラ」出演になる。

劇団四季を退団後、NHK朝の連続ドラマ「ロマンス」に、初の男性主役として登場したのが28歳の時。比較的遅いTVデビューだった。

「……夢が人生つくるのさ。」

彼が歌っていた主題歌のさわやかさも印象的だった。

この時、やはりこの「ロマンス」でTVデビューし、共演していたのが阪上二郎。いまだにこの時の友情が続いているという。

そして、10年ぶりに出演する「かりん」では、主人公の人生を左右する、いわばオイシイ役どころに挑戦している。

「いま、このドラマを撮っているときに、至福の時間になっているんですよ。共演者とのいい関わりということもあって……」

このところ、それまで旅先なんかで感じていた一期一会ということが仕事の上でもすぐわかるというか、それを感じる瞬間がいつぱい出て来たものだから。言葉の上ではわかっていても、それだけではなくて、日常生活でもね、ウン、やっと実践できてき

たかなと思えるようになったのね。また会えるという期待よりも、もう会えないかもしれないという覚悟のほうが、真摯な気持ちになれるというようだね。こんな事を撮影の直前に、千晶役の細川直美ちゃんに話したら、彼女、涙ぐんじゃって（笑）。このあと、思わず抱きしめるシーンがあったね。実に良かった（笑）。でも、こういうことで、僕の芝居に対する取り組み方が少しずつ変わっていくような気がしますね。」

笑顔がいい。やわらかな声質が心地よい。「昔はクライフてよく言われてましたけど、いつからこうサービス良くなったんだろ（笑）。確かに自分自身も変わってきていますけれども、もっと変わったのは、まわりというか時代じゃないかと思えますね。」

昔は、その時代の流れを捕らえよう捕らえようとして乗りそこねているようなところがあって、それなりのアセリもありましたけど、最近になって、無理しなければいけないほど、時代の方が乗っけてくれるみたいな感じがするようになったんですね。多くの表現するものを、そのまま流れに乗せていけばいい、それがたまたま絵であり、芝居であり……。それに対して、その時共鳴してくれる人がいたらそれでいいって思えるようになりましたね。」

「かりん」で演じる間宮浩平の泰然とした風情と、どこかイメージがダブって見えてくる。



The **SPECIAL** Real **INTERVIEW** Face

透明感を持つてば



「転機はありましたヨ、いくつか。浪人までして入った大学を中退して劇団に入ったとき、劇団をやめて、はじめてインドに行ったとき、TVデビューしたとき、そして一番大きかったのが角川映画『天と地と』。」

渡辺謙との凄まじいまでの主役交代劇の中で、彼ははじめて、ゼニをもらって、ちゃんとした役者にもなっている、ことを実感したという。

角川映画で彼は『天と地と』『天河伝説殺人事件』と2本の作品で主役を演じている。それだけに、あのコカイン事件の衝撃は大きかったに違いない。

それに対して、

「角川さんは僕にとっては、大事な恩人で

す。」

彼はきつぱりとそう言い切った。

『天と地と』を境には映画、舞台、ドラマをはじめ、旅のドキュメンタリー、それまで意識的に避けてきたクイズ番組やバラエティにも積極的に出演するようになった。

「それまでの僕は、仕事やってても、あの人はあっち側の人、この人はこっち側の人って分けてしまうところがあって、その比が10対1くらいだった。そういうことを異様に気にしていた時期があって、そういう時には芝居でも、相手に対して不自然な作爲が生まれるでしょう。いい仕事じゃなくなってしまう。今それが全然なくなってる、ものすごく楽になったんです。僕自身がある

種の透明感を持つては、素直になれる、自由に表現できるっていう気になれたんだと思う。だからこのころ舞台でも素直に泣けるようになった(笑)。」

芝居、絵、文章、言葉、彼は表現の手段を少しずつ広げはじめている。

「僕にとって表現っていうのは、決して押し付けではないんです。オレはコレだって、アピールするものではないんです。たとえば絵。旅先で、精神的に余裕があって、その土地の持つ歴史や空気が好きになったら、自然に絵筆を握りたくなる。そんなかたちでの表現。そういう意味では、いわゆる画家とは違っているかもしれない。腹立つたろうな、こんなヤツ(笑)。トーク番組でもそうね。オレはこうでこうでってあんまり自己主張しなくなってきたから、相手がイライラしてるのを感じる(笑)。」



ホテルの31階。窓辺に立つ彼の姿をカメラのレンズが追う。その窓から大阪の街が一望できる。西の空のあいまいな赤さを受けて、びっしりと立ち並ぶビルもまた不思議な色を見せている。

撮影を終えた彼は、足早にもとってくる

と、「最近ね」と唐突に言った。

「最近ね、自然に対して根本的な考え方が、すこし変わってきたような気がするんですよ。なんだか都会も自然の一部に思えちゃう。」

人間が自然ならば、その人間が人工的に創ったものも自然、ということなのだろうか。

「まさにその通り! (笑) 東京の絵なんか僕はとてもし描けないと思ってたんだけど、最近、東京を水彩画にしてみようかと思ったりするんです。何となく時間を見つけて『大東京展』をやろうかなんて思うわけ(笑)。」

恋の話、旅の話をしよう



「レンアイカン？恋愛観ね。ウーン、会いたい時に会って、暮らしたい時にいっしょに暮らす、これでいいんじゃないかな」
それはもしかしたら、相手の女性に「つごうのいい女」でいて欲しいというごとなの
だろうか。例えば、電話一本で出てきてく
れて、結婚をせまることも、じゃまになるこ
とも、我がままを言うこともなく……とい
うような。
「どうして女だからって、そういう発想する
んだらうなあ。そう言われても人それぞれだ

からね。世間の女性がそう思うんだったら、
ああそうですかって言うしかないし(笑)。
お互いがムリなく自然でいられるというこ
とが大切なはずなのに、あまりにも世間の
流れが「結婚」という二文字の常識論から
抜けきれないと思うな。そういうものを
取っ払っちゃった方が、いまキラキラでき
る関係でいられるような気がするんだけど。
刹那的っていうんじゃないかってね。でも現
実にはいろいろすべったり、ころんだり、
それはいっぱいある訳だけど(笑)。」



旅の話を聞きたい。
「インド、ネパール、中央アジア、南米、ミ
ヤンマー、チベット……アジアが多いですね
それもあまり人の行かない辺鄙なところ。
時々、はじめて足を踏み入れたはずの土地
で、たまらなく懐かしい思いをすることがあ
るんですよ。」
インドには、ほんの数日の休みを見つけ
ては出掛けるほど心酔している。
常識とかエゴにとらわれず、無理なく自
然に、そのときを気持ちよく生きて行く事、



「どうしても次の言葉が見つからないんです
よ。」
明らかに異邦人を意識させられてしまう
のは、こんな瞬間である。
榎木孝明にとって、旅は余分なものを捨て
てに行くためのもの、そして一期一会の美
学。
彼をストイックと称する見方も多いけれ
ど、だれよりも自分の生理に正直で、いつ
だって「気持ちいいこと」だけを求め続け
る。そんな旅はまだまた続きそうだと。

インドではそれができる。ネパールでは、当
時9歳だった少女との不思議な出会いがあ
り、しばらくの間は彼女の足長おじさんだ
った。ソ連崩壊直前の中央アジアの草原で
は、鷹の雄姿に魅せられた。
そのどの地にも、彼は素直になじんでき
た。そのつもりだった。
南米バナタール。ある小さな村で彼は、
赤ん坊にお乳を与えている女性に出会う。
その彼女に寄り添うようにしている数人の
子供たちも、みな彼女の子供たちである。
どの子も美しい目をしている。それなのに、
まだ若いその母親は、もう子供は生みたく
ないのだという。
「もう子供、いらななんだね。」
何げなく彼が口にした言葉に対し、彼女
は答える。
「でも、避妊するお金がないの。」
彼は絶句した。
「どうしても次の言葉が見つからないんです
よ。」



セレモニーはいらない

The SPECIAL Real INTERVIEW Face



NHK連続テレビ小説「かりん」より



榎木孝明 <PROFILE>

1956年 鹿児島県生まれ
1978年 武蔵野美術大学3年中退
劇団四季を経て、映画・TV・舞台で活躍中。

★映画 「雪の断章」「天と地と」「天河伝説殺人事件」「福沢諭吉」ほか

★TV 「ロマンス」「真田太平記」「愛無情」「太平記」「ソ連領シルクロード冒険」「南米パンタナル3000キロ」「チベット夢呼吸」ほか
★舞台 「オンディース」「その男ゾルバ」「カルメン」「マクベス」「ピカレスク・イアゴ」「リア王」「黒蜥蜴」「ラブレターズ」「夢千代日記」ほか

★個展 「ネパールの風景ほか・水彩画展」「ロケ地の情景・水彩画展」「中央アジアの情景・水彩画展」「ロケ地の情景・水彩画展Ⅱ」「水彩画展・チベットの碧」「版画&水彩画展・鷹の覚醒(めざめ)」

★画文集 「チベットの碧」「鷹の道」(現代書林)

静かな人である。武道に励み、乗馬を愛し、体力の極限に直面する旅を体験しながらも、不思議に「汗」を感じさせない人である。時には、生きることへの執着すら希薄な印象を受ける。

かつて、冬山で雪の斜面を滑り落ちたことがある。20メートルほど落ちたところで木の切り株に引っかけた奇跡的に一命を取りとめた。一年ほど前には口ケ先で落馬、全治3カ月の重傷を負い、夏のチベットでは重度の高山病に苦しんだ。

人間40年足らずの人生の中で、死を意識する事柄に出会うことなど、そんなに何度もあるものではない。

「そういう時、僕自身はかえって妙に冷静になつてしまふんですね(笑)。その状態になつたら、もう生きられることを信じるしかないじゃないですか。もちろん、まわりの人には大変な思いをさせてしまいましたけど。死ぬことに対するこだわり?…ウーン、それって、そんなに大げさなことじゃないんじゃない?もしかして。」

たぶん、これが彼の答への全てなのだろう。「最近、言葉に出して言えるようになったことは、あまり使命っていうことを感じなくなつたというか…。昔はどうせ生きてるからには、人間としてこうあらねばならないっていう意識が強かつたけど、そういうものがないなつちやつた。だから、以前はあんなに読んでいた精神世界の本とか、哲学書も読ま

なくなつてしまいましたね。ひとには薦めても…。(笑)。ほくにもそれが必要な時期があったんでしょうけど、今は自然の流れで…。」

そんな淡々とした語り口の中に、この穏やかさにたどりつくまでの、決して平坦ではなかったはずの道のりが、かすかに見え隠れする。

「死ぬ時は、スリット、いなくなっちゃうという消え方が最高じゃないのかって、オレは思うのね。そこにセレモニーなんかはなんにもいらない。アレッ、あいつ最近見ないね、いなくなつたね、ああ死んじゃつたの?ぐらいのね。」

彼のエッセイの中に、こんな一節を見つけた。

「人は時代を抛り起こし、時代から何かを学び取るうとする…。(略) 青空はその古(いにしえ)の青さと同じ青さで横たわる。わたしの骸骨はあと何世紀後の学者たちに掘り起こされるのだろうか」

ある時期、榎木孝明の肉体に宿った魂が、歳月を重ねて朽ち果てた肉体の残骸を、どこか広い宇宙の一角から静観している、そんな情景を想像してしまふ。

時も空間も越えた旅先の風の中で、ふと、振り向いた顔に見おぼえがある。

「あつ、彼だ!」
いつか、そんな出会いをしてみたい。